

# 第八章

## 戦国時代の亀山市域

# 第一節 応仁の乱と関氏

## 第一項 応仁の乱の勃発

**大名家の後継争い** 宝徳元年（一四四九）四月、足利義政は元服し、正式に將軍職に就任した。將軍義政は鎌倉公方や大名家の内紛に介入して、嘉吉の乱で失墜した將軍の権力と權威を回復しようとした。享徳三年（一四五四）には鎌倉公方の足利成氏が関東管領上杉憲忠を謀殺した享徳の乱が起こり、義政は弟の政知を鎌倉公方として送り込んで成氏の追放をもくろんだが、上杉氏の支持が得られずに失敗した。義政は加賀国守護富樫泰高と教家との間の内紛に介入し、尾張国の守護代織田氏の内紛にも介入したが、細川氏・斯波氏らの有力大名の反対により、その意思を通すことはできなかつた。

將軍義政は畠山氏の内紛にも介入した。嘉吉の乱後に管領を務めた畠山持国は、弟の持富の子弥三郎を養子にしていたが、実子の義就が生まれたため、彼に家督を譲ろうとした。これに對して有力被官の神保氏らが、義就の母が遊女であることを理由に反対したが、義就は武力で弥三郎と神保氏を追い落とし、享徳四年（一四五五）に將軍義政から家督繼承を認められた。

しかし畠山弥三郎や神保氏は管領の細川勝元と結んで巻き返しをはかり、一転して將軍義政は長禄四年（一四六〇）に弥三郎の弟の畠山政長に家督を安堵し、河内国に下った義就を討伐する命を下す。この戦に関氏・長野氏・北畠氏も動員されており、長野氏は主力の和泉口から河内国に攻め入り、関氏と北畠氏は後詰めで山城国の宇治郡口を守っている。

管領細川勝元と山名持豊（宗全）は、勝元の子政元が持豊の娘と縁組みするほどの親しい関係だったが、細川勝元が山名氏の宿敵だった赤松氏の復権を援助したために関係が悪化した。

細川勝元は畠山氏の内紛では政長を援助し、敗れた義就は山名

持豊を頼った。斯波氏も義敏よしとしと義廉よしかどとの間で家督を争い、義敏は細川勝元、義廉は山名持豊の援助をあおいだ。こうして家督争いを続ける諸大名は、細川勝元と山名持豊を頭とする二つの勢力に分裂して行った。

**將軍家の後継問題** 寛正六年（一四六五）三月末、將軍義政の側室に男子が産まれ、関盛元は太刀（銘国時）をお祝いに進上し、一門の峯康長みねやすながも菱食ひしくいを贈っている。四月には父の持盛（安芸入道性盛）が百袋の新茶を將軍に進上している。この時代から既に亀山の地で茶が生産されていたとみえる。この時生まれた男子は義政の子ではないとされてしまったが、同年十一月には夫人の日野富子ひのとみこに男子（後の義尚よしひさ）が誕生した。関持盛はさつそく雁・貝鮑かいあわび・海老を贈っている。

しかし足利義尚の誕生は將軍家の後継争いを招いた。この前年に將軍義政は、寺に入っていた弟の足利義視よしみを還俗させて後継者に指名し、細川勝元の屋形に住まわせていたのである。義尚が生まれると、慣例に従って政所執事まんどころしつじの伊勢貞親いせさだちかが養親になった。翌文正元年（一四六六）の七月、義視に男子（後の義材よしき）が生まれると、義尚の将来に不安を持った伊勢貞親は、山名持豊が義視を新將軍に擁立する謀反をたくらんでいると義政に讒言ざんげんした。

これには細川勝元と山名持豊が共に怒り、諸大名が一致して伊勢貞親一派の追放を義政に求めた。これを文正ぶんしょうの政変と呼ぶ。京都を追放された伊勢貞親は伊勢国の関盛元のもとに避難した。貞親が関氏を頼ったのは、関氏と伊勢氏とが同族だったことによる（第七章第二節第一項参照）。この事件で將軍義政は第一の側近を失い、政務の意欲を喪失してしまったと言う。

**応仁の乱の勃発と関氏** 文正の政変によって山名持豊の力が強まり、この年の末には山名持豊と一色義直の誘いにより、畠山義就が河内国から大軍を率いて上洛した。この圧力を受けた將軍義政は畠山政長が務めていた管領職を解任し、畠山氏の家督



写真133 上御霊神社 (京都市北区)

突した。ここから応仁・文明の大乱が始まったのである(写真

133)。

細川勝元は当初、將軍義政の命に従って兵を動かさなかつたため、山名方が優勢となつたが、五月に入ると細川方の巻き返しが始まり、一色義直の屋形を攻め落とし、隣接する將軍御所をも手中に入れた。勝元は將軍義政に山名持豊討伐の命を請い、義視も將軍御所に移した。これに対して山名方は堀川上立売にあつた山名持豊の屋形を中心に陣を構えた。こうして細川方は將軍御所、山名方は山名屋形を拠点として京中で合戦を繰り返すこととなり、細川方を東軍、山名方を西軍と呼ぶようになったのである(写真134・写真



写真134 花の御所跡の碑

(京都市上京区烏丸通上立売上御所八幡町 大聖寺)

135)。

伊勢国守護の一色義直は西軍の中心人物の一人だつたため、一色氏と勢力を競つていた関氏と長野氏は東軍に属した。將軍義政を擁した細川勝元は一色義直の守護職を解任し、新守護に土岐政康を任じたが、伊勢に内部しようとし

も義就に与えてしまふ。さらに山名持豊は応仁元年(一四六七)正月十五日、一色義直・畠山義就・斯波義廉らと共に將軍御所を包囲し、將軍義政に細川勝元と畠山政長の討伐を求めた。これを聞いた畠山政長は自邸を焼き払つて上御霊社に陣を敷き、正月十日には畠山義就の軍勢と衝



写真135 応仁の乱 西陣跡  
(今出川通り大宮東入る 京都市考古資料館前)

た政康は一色氏の守護代石河道悟どうごとその子親貞ちかさだによつて撃退された。関盛元は土岐政康に娘を嫁がせて同盟し、一党を率いて一色方の城を攻めたが、これも退けられた。しかし石河父子は一色義直から京都での戦いに加わるよう求められたため上洛して行った。

文正の政変で関盛元のもとに避難していた伊勢貞親は、細川勝元の誘いにより五月末に関氏と長野氏を率いて上洛し、東軍に加わろうとした。しかし將軍義政と同居していた義親は、自分を亡き者にしようとした貞親を許さず、貞親は再び京都から追放されて、今度は長野氏の館に避難した。関氏と長野氏の軍勢は京都に留まり、関氏は備前国の勝田氏と共に三条御所を警固し、長野氏は相国寺しょうこくじの東門に詰めたといい、『勢州軍記』。ただし関氏と長野氏の軍勢は上洛しなかつたとする史料もある（『大乘院寺社雑事記』）。

## 第二項 伊勢国の争乱

**足利義親、西軍へ** 応仁元年（一四六七）六月には東軍が優勢を確保したが、八月下旬には周防国・長門国すおう（山口県）、筑前国ちくぜん（福岡県）、豊前国ぶぜん（大分県）の守護である大内政弘おおうちまさひろが大軍を率いて上洛し西軍に加わったため、再び形勢は逆転した。

大内氏の大軍が京都に入った日、足利義親は將軍御所を出て伊勢国の北畠氏のもとに逃れた。この行動の理由は謎だが、「応仁略記」によると、大内勢の侵入という混乱の中で義親が西軍方に奪われないよう、細川勝元が北畠氏と打ち合わせて避難さ

せたという。

翌応仁二年（一四六八）二月に將軍義政は、義視に対して京都に戻るよう求めたが、義視はなかなか応じなかった。ようやく八月になって義視は上洛を承諾し、八月十八日には安濃郡岩田の円明寺、二十五日には長野に着き、関氏一門の加太氏と伊賀国守護仁木氏の出迎えを受けている（史<sup>738</sup>）。彼らの警固を受けて義視は鈴鹿山を越え、甲賀を経て九月十一日に入京した。

京都に戻った義視だったが、閏十月に伊勢貞親が伊勢から戻って政務に復帰すると、これを許した將軍義政と不和になり、十一月には比叡山に逃れ、翌文明元年（一四六九）三月には西軍の山名持豊の屋形に入った。足利義視は西軍の旗頭となり、四国・九州の諸大名に兵を率いて上洛するよう命じ、朝廷に対して大内政弘の官位官職を申請するなど、將軍に準じる存在として振る舞った。西軍は文明二年（一四七〇）五月には後南朝の小倉宮の皇子を迎え入れ、東軍に対抗する朝廷までも作り上げた。

こうした西軍の行動は室町幕府を完全に分裂させ、東西両軍の戦いはいつそう激しくなった。その中で、守護代クラスの武家の中から、守護職などの恩賞を求めて東軍から西軍、西軍から東軍に寝返る者も現れる。近江国では東軍方の京極持清が守護代多賀高忠たがたかたの活躍で西軍方の六角高頼ろっかくたかよりを圧倒していたが、文明二年八月に京極持清が亡くなると多賀氏の家中が分裂し、一方が六角高頼と結んだため、多賀高忠は関盛元を頼って伊勢国に落ち延びている。文明三年（一四七一）には西軍方の斯波義廉の守護代として活躍した朝倉孝景あさくらたかかげが、誘いに応じて東軍に寝返り、越前国守護に任じられた。

**関氏と長野氏との抗争** 伊勢国では、文明二年（一四七〇）十月、北畠教具のりともが北方に進出を始め、長野氏と衝突した。教具は翌年に亡くなるが、後継の北畠政郷まささかは東軍から伊勢国守護職に任じられ、初めて伊勢国の国司と守護を兼帯した。北畠氏のこ

の行動は、これまで東軍として共に戦ってきた関氏と長野氏との仲を裂いた。文明二年十月に関盛元は鈴鹿郡の安楽御厨あんらくみくりやの代官職を長野氏から奪っており、これ以降、北畠氏と結んだ関氏と、長野氏との戦いが続く。

長野氏は土岐氏と結んで巻き返しをはかった。土岐（世保）まさやす政康は伊勢国守護を解任されたが、同族である美濃国守護の土岐成頼しげよりの援助を得ることができ、成頼のもとには強力な守護代さいとうみょうちん斎藤妙椿が居た。長野氏は文明五年（一四七三）九月、安濃郡神部司職を北畠政郷から奪い、関氏一門の国府氏と結んで鈴鹿郡岩森を押さえた（史749）。十月初旬には美濃国の土岐勢が長野氏と結んで伊勢国に侵入し、北畠氏・関氏と結ぶ北伊勢の国人が朝明郡梅津城に籠城して抵抗したが、月末に斎藤妙椿が大軍を率いて参陣するに及び、翌文明六年（一四七四）六月には攻め落とされた。

関氏が支配していた安楽御厨あんらくみくりやも、この戦いの戦況に応じて支配者が二転三転した。文明五年十月初旬に長野氏が取り戻し、下旬には再び関氏が奪取し、十一月には再び長野氏が奪回している。この戦火に巻き込まれて、文明四年（一四七二）には神福寺が焼亡している（史840）。

**守護一色氏の復帰と撤退** 京都では文明五年（一四七三）三月に山名持豊が亡くなり、後南朝の擁立に反対だった畠山義就らにより小倉宮の皇子が追放された。持豊の後を追うように細川勝元も同年五月に病没し、東西両軍の大將が居なくなる事態を迎えた。十一月には將軍職が義政から実子の義尚に譲られ、翌文明六年四月には山名持豊の子政豊まさとよと細川勝元の子政元まさもととが和睦を結び、七年間にわたる応仁の乱は形式的には終結したのである。

しかしこの和睦は京都での戦闘が終結したことを意味するだけで、畠山義就は和睦によって政長に守護職が与えられることを恐れ、河内国に下って実力で支配を確立した。赤松氏も乱中

に回復した播磨国はりまなどの旧領を山名氏に奪われまいと戦いを続けた。

文明九年（一四七七）五月、西軍方の一色義直の子、義春よしはるに伊勢国守護職が返還された。しかし北畠政郷は納得せず、伊勢に入部しようとした一色氏の軍勢を打ち破った（『大乘院寺社雑事記』）。もはや守護の地位は幕府の命令一つで交替するものではなくなっていた。

文明十一年（一四七九）八月に幕府は再び一色義春を守護とする命を下し、守護代として石河直清いしかわなおきよが入部したため、守護一色氏と結んだ長野氏と、国司北畠氏・関氏との抗争が再燃した。当初は長野氏が優勢だったが、翌文明十二年八月には関氏が勝利し、安楽御厨の代官は関氏一門の峯盛長が知行することになった。長沢御厨の代官職も長野氏から峯氏に移っている。

関氏と守護一色氏との小競り合いは続き、文明十四年（一四八二）五月には守護代石河氏が関盛元の知行する鈴鹿郡豊田をおうりょう押領したため、かわって関盛元が守護代の知行する三重郡楠警固を押さえている（史814）。関氏は奄芸郡にも進出しており、同郡尾崎郷にある神宮寄進地の知行について、神宮からの要望を聞いている。一方、このころ加太氏は守護代の被官になって志摩国泊大里前警固の代官を務めており、関氏と距離を置いていたようである。

伊勢国には諸勢力が分立し、相互に入り組む複雑な情勢になったが、守護代石河あての書状は文明十四年（一四八二）八月を最後に見られなくなり、守護一色氏の勢力は衰えたようである（「内宮引付」）。文明十五年（一四八三）十一月、陸奥国むつの大名の伊達成宗だてしげむねが伊勢神宮に参宮するにあたり、細川政元の後见人だった細川政国に道中の安全確保を依頼した。政国は伊勢国での安全のため、北畠氏・長野氏・関氏の三方へ書状を出しているが、そこに守護一色氏の姿は見られない。